

# 図書館だより

第 2 号

1982年2月1日

発行所  
津市一身田中野字盛付157

三重短期大学附属図書館

## 読書のすすめ

学生部長 刀根 騎一郎

あれは大学一年生の秋だった。京都大学の桑原武夫先生の講演会に出席し先生から一日一冊の読書と幅広い分野の読書の必要性を教えられ、それ以来学生時代は暇があると図書館に通ったものだった。一日一冊といえども実行することは大変であり、本の内容、ページ数、自分の好み等を考えると、どうしても厚い本は敬遠がちになり、私が一番よく読んだのが岩波新書だった。一冊約5時間で読めるし内容も幅広く得られるし、私の目的に通っていた。また授業中、体育哲学の先生が学生時代約1000冊の岩波文庫を読破した話を聞き、私は岩波新書を全部読んでやろうと決めた。当時の発行冊数は約300冊で私には手頃な目標だった。

貧乏学生であり本がほしくて専門の体育関係が精一杯で教養、娯楽的なものはどうしても購入出来ず、もっぱら図書館の新刊コーナーに走り、新しいものを中心に読んだものだった。

今、振り返ってみると学生時代の読書は図書館とのつきあいだった。図書館が親しめる場であり、あの閲覧室や書庫の雰囲気も好きだった。

学生時代の私の読書でもう一つ特記すべきことは、沢山の先生、先輩達の経験談を聞いて自分なりの「読書ノート」を作ったことである。読んだ本の内容をまとめたり、感銘を受けた文章、語句、参考文献等をノートに書きこんでいった。実は卒業論文を書くとき、このノートが非常に役立ち悦びに入ったものだった。

最近の学生の読書について思うことは、幅広い読書と何回も読み返す愛読書の不足をあげたい。学生時代の読書は先生から示唆されることが多いが、ぜひとも読んでほしい。そうすればその中から自分が感銘を受けたり、傾注する本が一二冊は必ず出てくるものだ。そんな本に出会うまで示唆された本をどんどん読んでいつてほしい。

また幅広い読書については、文科系の人には理数関係を敬遠するし、逆に理数系の人には文科関係を敬遠しがちであるが、どちらも大切なことである。大学に入るまでの読書は受験という限られた範囲のもので余裕のある読書とはいえない。大学に入ってから読書は受験という制限もなくなり、自分中心の余裕のある

読書が出来る。自分の好きな分野は勿論、あらゆる分野にわたって読んでほしい。しかし興味をもつまでが大変である。私はそんなときに雑誌から

## 巻頭言

入っていくのが効果的だと思う。私は学生時代「文芸春秋」、「中央公論」、「世界」を特集の内容を見ては読んだし、また「科学朝日」は私の好きな雑誌で、医学、工学、理学、教育等に関する記事が平易で理解しやすく書いてあり興味をもった雑誌だった。

また、私は音楽と言うだけでアレルギーを起こすほど学校の音楽の授業はきらいだった。ところが中学時代の国語の授業でベートーヴェンの伝記を読んで、音楽家というレッテルをはずして「人間ベートーヴェン」に興味をもち、以来ベートーヴェンに関する本や雑誌の特集を集め、現在にいたるまで読みあさっている。

以上読書のすすめを特に大学時代を中心に述べてきましたが、学生時代は自由時間が豊

富にありこの時間を利用して知的生産の糧としての読書に傾注することも貴重なことだと思う。学生時代は、何かに打ちこむものがあった学生ほど大学生生活に満足だったという者が多い。今打ちこむものがない学生は一つ読書に挑戦してみてはいかがですか。図書館がそうした学生で満ちあふれる日を期待しています。

## 一冊の本

「衣の社会学」 加藤秀俊著 を  
読んで 家政科助教授  
図書館員 佐武 千恵子

衣の社会学という変わった題名をみて、早速読んでみた。これは私たちが身にまとい、身につけている「衣」の原点からさぐったもので、これが現代に至る歴史、そして現代的意味を著者の豊富なエピソードを、織りまぜながら書かれている。

例えば女性の持つハンドバッグは装飾性に力点をおき、おしゃれの小道具としか考えられていない。しかし一方男性のは書類や、ファイルなどのはいるブリーフ・ケースを持ち歩くようである。女性が職業に真に取り組むときこそ、機能性のあるバッグが開発されるだろう。ハンドバッグの将来は働く女性の思想と行動の変化にかかっていると説いている。こういう考察もできるのかと思ったものである。その他、帯、首飾り、指輪、エプロン、口紅など、女性に関係の深い品目を取りあげているが、どのテーマを読んでも著者の考察は鋭く、興味深く読むことができた。

最近高等教育を受ける女性が増えてきた。それ故かどうか女子学生のイメージは大幅に変ってしまった。流行の衣服に身をつつみ、本をアクセサリに持ち、楽しげに歩く姿をよくみかける。授業に必要な本だけを要領よく読むコツもあるそうである。

しかし、若い学生時代に多くの本を読んでほしい。特に最近衣生活が高級になり、流行に追い回されている感じがする。この本を読んで衣の意味を理解してほしいと思うものである。

## 全国図書館大会に出席して

法経科助教授  
図書館長 瀬島 順一郎

昭和56年度全国図書館大会は埼玉県浦和市で10月29日～31日の日程で盛大に開催された。大会のテーマは「人間性を深める図書館活動の広がり求めて」である。第67回目を迎えた今回の大会は、初めて埼玉県で開かれたこともあって、県の力の入れ方も大変なものであった。大会は初日の29日、埼玉会館で田中龍夫文部大臣を迎えて開会式と全体会が開かれた。浜田敏郎日本図書館協会理事長の基調報告の後、色川大吉氏（東京経済大学教授）の記念講演「「明治の精神」に学ぶもの」があったが、色川氏の熱の入った話は印象的であった。今年は自由民権運動100年で、秩父事件その他の自由民権運動史や資料関係の出版ブームで、日本図書館協会からも「自由民権関係文献目録一関東地方を中心として」が出されているし、書肆アクセス、紀伊国屋書店からも同様な文献目録が発行されている。色川氏の話は、昨年のNHK大河ドラマ「獅子の時代」の後半の秩父困民党事件を扱っていたことに始まり、NHKがこのような体制に反逆した土着の底辺の農民の運動を描いたものは始めてではなかったかと一応の評価はしつつも、ドラマの中では、一部の知的な土族中心の描き方をしてあったことに対しては、歴史観の相違としては片づけられない乖離があるとして厳しく批判の目を向けている。ここで氏の得意とする、足で歩き実証的資料を探索するという方法から導き出された自由民権運動史、あるいは秩父事件の実態が浮き彫りにされるのである。当時の自由民権運動が一部の土族やインテリゲンチヤーのものではなく、自由農から貧農、あるいは老若男女を問わないきわめて底辺の広い活動であったことは、一農村の若者の手記や、馬車すら通わない辺境の地に5万余冊の蔵書をかかえた石坂公歴の父昌孝の私設図書館の存在、また五日市市の奥にあった深沢家の蔵にあった当時の新刊本200冊、あるいは、各

地に存在したと思われる新聞読覧所（新聞にすべてルビがふってあり誰にでも読めるようにしてあったといわれる）等をみても、自由民権運動の枝は民衆の生活の中に根づいていたといえと色川氏は主張する。さらに当時、結社と呼ばれるものが多数存在したと思われるが、結社の数は中央（東京）から離れていくにしたがい増加する傾向があり、関東では奥多摩地区から埼玉県にかけてかなりの数の結社が存在したと思われる。関東地方では、その数およそ350社と推定されているし、東北地方においては180社、自由民権運動家であり、日本国憲案起草者の植木枝盛等の活躍した土佐においても150社はあったと推定されている。全国ではその数およそ2000社というのは控え目の概算であろう。さらに当時の自由民権運動家は、村民の日常生活の指導から公衆衛生の指導までも手がけたといわれ、社会教育の一端を担いつつ自己学習活動を行っていたという。集会では村民を集め講義や討論をし、時には中央の名の通った運動家をつれてきては勉強会をしたといわれる。当時、尾崎篤道（行雄）、犬養毅などは手弁当でどこへでも出かけて歩いた若き運動家であった。

当時の民権運動の骨子をなす、憲法草案は、有名なものでは、盛岡憲法草案や、植木枝盛の手になる日本国憲案、五日市憲法草案などがあるが、例えば「日本国憲案」をみると、「日本人民ハ思想ノ自由ヲ有ス」、「日本人民ハ如何ナル宗教ヲ信スルモ自由ナリ」「日本人民ハ自由ニ集会スルノ權ヲ有ス」「日本人民ハ自由ニ結社スル權ヲ有ス」「日本人民ハ信書ノ秘密ヲ犯セザルベシ」「日本の人民ハ生命ヲ全フシ形体ヲ全フシ健康ヲ保チ地上ノ物件ヲ使用スルノ權ヲ有ス」（朝日新聞1981・11月11日「日記から」井出孫六より）とある。これを見ても当時ではかなり進歩的であることがわかる。大体当時の憲法草案について共通して見られる特徴は、一つに言論出版の自由、自衛権（武器所有権）、自治権といったものが挙げられるが、ここに流れる権力に対する考え方というのは、「権力というものは放置しておくと必ずや悪をなすものであり、その意味で良い政府などとい

うものは存在しない。ただ人民が良い政府たらしめるのみ」という風潮が感じられる。

この点から考えると、現代に生きる我々は果たしてどうであろうか。既存の組織、システムや安易な法意識の上にややもすると安住しがちなのではないだろうか。豊かな物質文明を享受している我々は飢や寒さからくる精神の波立ちを知らないで過ごしているのではないだろうか。

個の確立という考えが希薄な日本人感情にとっては、「武器所有の制限」というような考えはごく当たり前のように思えるらしいし、高速道路の制限速度を100km/hから80km/hにするというような案を「お上が国民のために制限してくれているんだ」という解釈をする向きも多い。精神医学者は社会防衛の智であるという考え方、ほんのり活動というのはコストのいらぬ社会教育だという考え方などはみなこの日本的依存性（よりかかりの発想）からきているような気がしてならない。

色川氏も現代人のあまりに組織によりかかったひ弱さを痛烈に指摘している。「明治の精神」に学ぶことは、一人一人が個人として目ざめ、責任を持つことによって大きな社会的な流れの礎を作ることができるということである。終始、色川氏は情熱を傾けた弁舌をふるわれたがその姿にふと手弁当で村の集会に足を運び熱弁をふるった若き明治の運動家のイメージをかい間みたのは私一人ではなかったのではないだろうか。

一夜明けて30日（金）は9時30分から第5分科会の「大学図書館」に出席した。ここでも、「学術情報システムにおける大学図書館の役割」と題して、文部省の学術国際局情報図書館課長の田保橋彬氏の講演があったが、この方は文部省の基本方針と情報システムの現状と大学図書館に対する、きわめて官儀的発想による行政指導があったにすぎず講演とは名ばかりで業務報告のようなものであった。

前日の色川氏の熱弁とは対照的で、まことにクールで味のないものであり鼻白ひ思いをしたのは、これまた私一人ではなかったのではないかと思う。中でも極論ではあるがと断わりつつも、図書館業務は館長一人いてあと

は臨時職員でもこと足りるというような発想には聴衆もあ然としてしまった。これに対して第8分科会(図書館職員)で行われていた「図書館の自由をささえる図書館員の役割」との関係で、臨時職員でこと足りるといったことはどういう意味かという質問が出たが、件の文部官僚氏は、自分で言うておきながら、その質問は当テーマと関係がないとつっぱね倣岸ぶりを発揮した。おそろしい強弁ではある。

奇しくも自由民権100年をサブテーマにした全国図書館大会でひょっこり顔を出した権力であった。

「グーテンベルグ博物館」(マイ  
ンツ)を訪ねて

法経科教授 岩本 勲

ドイツ側ライン下りの起点の小都市、それが、Meinz (マインツ)ですが、うかつなことに、そこを訪れるまでは、この小都市が、あの活版印刷の創始者Gutenbergを生み出した偉大な町であったことを知りませんでした。

当然のことに、町はグーテンベルグを一番の誇りとしています。

市庁舎前には大きな像を建て、最初の活版印刷が行われた場所の近くでもある町の中心部に古風でがっちりしたグーテンベルグ博物館を1962年に開設しました。以来、今日まで、約150万人以上の人々がここを訪れているとのことです。

博物館の宝物は何とんでも1452年にグーテンベルグによって刷られた完全なバイブルです。大判多色刷りのそれは今なお鮮やかで、見た者はすべて一瞬息を吞まずにはおれません。見事の一瞥に尽きます。幸い、当時と同じ機械で刷ったコピーが販売されていますので、皆さんにもいつかお目にかける機会があるかと思えます。これだけではなく、一目見ただけで、背筋がゾクゾクとするような書物がズラリと展示されています。

一例を挙げればThomas More's, Utopia, Basel 1518. あるいはLivius, Titus Historiae

is Romana, Venedig, 1469, 1470年両版。

手許に資料がないので確かなことはいえませんが、Machiavelliが、「ローマ史論」を書いた時、手許において参照したのもこのようなものだったかもしれません。

このように、想像を刺激する展示物が随所にありました。

Martin Luther, Bible Wittenberg, 1524, 1530, 1534年各版。これが、最初のドイツ語訳の聖書で、近代ドイツ語の基礎を形成したもののか、「ふーん、なるほど」と思わずつぶやきました。

面白いなと思ったのは、すでに1511年パリでフランス語の教本が出版されていたことや16世紀にはトランプが、18世紀には、案符が印刷されていたことです。当時の案符は今のオタマジャクシと違って四角な印を五線符に刷っています。

博物館はヨーロッパの活版印刷物だけではなく、最新の印刷物まで含め、あらゆる国のものを集めています。ただし、この方は意あつて力足らずか、余り感心できないものもありました。

たとえば、日本のものは、法隆寺の壁画、浮世絵(北斎、国定など)、陀羅尼、築城典刑、「印」(子龍森田、Roger Cailliois 共著の豪華本)等、全く非系統的で偶然、博物館が入手したようなものばかりのうえ、「印」はさかさまに展示されていました。このことを係官に伝えると、「日本の文字は全く分らない」というばかりで、置き直そうとする気配もありませんでした。

グーテンベルグの印刷機から今日までの印刷機が展示されていましたが、輪転機や最新のコンピューター印刷などを別とすれば、つい最近の平版の印刷機に到るまで、グーテンベルグの原理と根本的には違わぬものばかりでした。

活版印刷機が文明の発展に果たした測り知れない意義は、いまさら改めて確認するまでもないでしょうが、それがいかに時代の要求にマッチしていたかは、印刷機の普及の早さを

みることによって知れます。ゲーテンベルグがマインツでそれを発明したのが1450年頃、15年後にはイタリーにそれが伝わり、イギリスへは1477年、北方ストックホルムへは1483年、東欧クラカウ（ポーランド）へは1473年、南へはクラナダ（スペイン）1473年等、ヨーロッパ圏はおよそ15世紀の終りまでに印刷機の普及をみています。日本もかなり早く、1590年に伝わっています。

機会があれば是非もう一度ゆっくりと全展示物を丹念に見てまわりたいという思いを残しながら、博物館を辞しました。

## 数字について

家政科教授  
図書委員 長田 窓衛

日本では、一より大きな数字は一十百千万億兆京核外極正載極となっている。又一より小さい数字は、分厘毫忽微纖沙塵埃となっている。数字の一番大きいものが結局のところ、とどのつまりというわけであって、この語源は鱈（ほら）が成長して老年になると「とど」と名称を変えていく成長魚の一種であって最後を意味するものである。又このことを究極といい、数字の最後である極に通じるものである。

地球の両極が南、北極であり、京都の繁華街の極点が京極である。

現在日本での貨幣単位として兆まで使用されているが、昔はそのような膨大な数字は考えてはいなかったと思う。しかし中国ではそれ以上の数字の単位を決定しており、その当時として恐らく京が最高値と考えていたのではないだろうか。それで南、北の大きな都を南京、北京と名づけたのである。

日本においても最大の都を京都と名づけ、明治になって東へ移行したので東京となり、その中間に位置する名古屋を中京と名づけたわけである。実際には魚ではないが海に生息している関係上、一番大きなものに鱈（くじら）と名づけたのである。

一方外国では、10をデカ（Deca）

100をヘクト（Hecto）、1,000をキロ（Kilo）、10,000をミリア（Myria）、1,000,000-10をミリオン（Million）と名づけミリオン分の1、すなわち、百万分の1をPPM（Part Per Million）とよび、英国では $10^{11}$ 、欧米では $10^{12}$ をそれぞれビリオン（Billion）として、その分の1をPPB（Part Per Billion）とよび、英国では $10^{15}$ 、欧米では $10^{18}$ をそれぞれトリオン（Trillion）と名づけ、その分の1をPPT（Part Per Trillion）とよんでいる。

これが欧米諸国では最大の数値であって、1より小さなものでは $0.1 = 10^1$ をデシ（Deci） $0.01 = 10^2$ をセンチ（Centi） $0.001 = 10^3$ をミリ（Milli）、 $0.000001 = 10^6$ をマイクロ（Micro）と名づけている。

日本では $10^8$ は兆であり、 $10^{12}$ は100京である。このように日本ではいくら数字の呼称が大きくなると現代はその半ばであって、今後いくらインフレが進行していこうと貨幣の単位に困ることは絶対にあり得ないわけである。

## 経商13期生 大田 久美

何かふさわしいことを書こうと思うのだが、このごろのように怠惰な生活をしていると、書くことがない。書くことがあっても、書くのがめんどくさい。何か思いついたとしても、二、三日ほったらかしにしておけば、何を書くつもりだったのかわからなくなる。

ところで、自分のように図書館を利用しない学生が、この図書館だよりとやらの紙面を汚してよいものだろうか。もっばら日なたほっこをしながら、あるいは、駄菓子鉢をかかえながら、寝そべったりして読むのが好きなものであって、図書室で、背中を垂直にして読むと、あの独特の義務感のようなものが襲ってくるのに耐えられなくなるのだ。

本なんて、読めと言われて読むものじゃない。又これを読めと示されて読むものでもない。どんな形にしろ、どんな場所にしろ、自

分で選んで、自分なりの計画で読むものだと思っている。感激は、自ら手にし、読んだ本だけに発見できる。そんな時は、心の中に新しい宝物がたくわえられた気がするのだ。

最近、自分なりに、原典をさがそうなんて大それたことを思いつき、昔へ昔へさかのぼって読むことにしている。明治の文藝など読んでみると、その博学ぞろいに驚いて、これは、一生かかってもここから先へさかのぼるのは、無理ではないかなどと、へんなあせりを感じたりする。そのせいか、ベストセラーや最近の新刊に目もくれず、偏読も甚しい。が、世の読書子のみなさんならわかって下さるのではないか。でも本で、なんてこわいものなんでしょうね。読めば読むほど抜けだせなくなるおそろしいもの、それは本でございます。

## 新刊案内

### 丹羽文庫 前学長 丹羽 友三郎氏寄贈

日本の経済大典1~6 瀧本 誠一  
日本庶民生活資料集成11~20 谷川 健一  
思想調査資料集成1~28

#### 思想調査資料集成刊行会

古事記伝1~45 本居 宣長  
言 泉1~6 落合 直文  
昭和国勢総覧上、下、  
矢内原忠雄全集1~29 矢内原忠雄  
本居宣長全集1~22 本居 宣長

#### 総 記 (000)

図書館の論理 羽仁 五郎  
朝日新聞縮刷版1981, 5~11

岩波新書158~175  
図書館の時代 石見 尚

唯物論全書全50冊  
主題書誌索引 深井 人壽

#### 哲 学 (100)

キルケゴールの講話遺稿集2 キルケゴール  
ルソー全集14 ルソー  
プラトン全集1~15 プラトン  
ギリシャ哲学史綱要 ソエラー  
神話の宗教 オットー

ソクラテス以前、以後 コーンフォード  
宗教から哲学へ  
ニーチェ全集2、3、 ニーチェ  
ギリシャ人と非理性 ドゥス  
ギリシャ神話の世界観 藤縄 謙三  
神話の形而上学 ギュズドルフ  
老子の哲学 大浜 皓  
自然の観念 ウッド  
初期ギリシャ哲学者断片集 山本 光雄  
言語の心理学 パラモ  
達成動機の研究 林 保  
記憶の科学 ノーマン  
動機づけの情動 コプアー  
認知心理学 ナイサー  
Readings in Philosophy of  
Psychology Block  
Human Memory Underwood  
The Origins and History of Consciousness Neumann  
Personality Theories Maddi

#### 歴史 (200)

大日本人名辞書1~6  
明治15、16年地方巡察使復命書(上、下)  
日本史小百科12  
原爆をみつめる 飯島 宗一  
トインビーと文明論の争点 山本 新

#### 社会科学 (300)

現代マルクス、レーニン主義争論下  
やさしい簿記入門 安平 昭二  
ケインズ全集9 ケインズ  
石田英一郎全集1~8 石田英一郎  
文献選集日本国憲法1~16 有倉 滋吉他  
土地取用法50講 鈴木 祿弥他  
建築基準法 遠藤 浩他  
土地地区画整理法50講 下出 義明他  
医療法人会計 森 久雄  
日本食物文化の起源 安達 巖  
日本外交史研究 大山 梓  
英文契約書 岩崎 一生  
経済白書S56年版 経済企画庁  
消費生活と法 加藤 一郎他  
社会科教科書の日米比較 教科書研究  
国際身分法序説 センター  
本浪 章市

日本民俗文化大系 1-12 色川大吉他  
 社会科教科書シリーズ全15冊  
 世界の民俗の生活  
 社会心理学を学ぶ 大橋 正夫  
 学制七十年史 文 部 省  
 ポケット経済経営外来語辞典 柏崎利之輔  
 W・I・Lenin Werkel-40別巻3 W・I・Lenin  
 道德感情論 アダム・スミス  
 Marx Engels Gesamtausgabe Ⅱ/1  
 Marx, Engels  
 " Ⅱ/2  
 ドイツ法律用語辞典 山田 巖  
 日本の姿 別枝 鷹彦  
 生活様式の社会心理学  
 民族社会の社会心理学  
 文化人類学事典 祖父江孝男  
 他  
 昭和前期慶政経済名著集2・14 小平 権一  
 債権担保の法律 並木 俊守  
 代金回収の法律 "  
 株式会社の法律 "  
 小渡手形・小切手の法律 "  
 取締役の法律 "  
 マルクス資本論草稿集1. マルクス  
 条例研究叢書8 高田 敏  
 法律学全集2.8会社法 鈴木竹雄他  
 財政学を学ぶ 高橋 誠  
 都市化時代の行政哲学 総合研究開発機構  
 地方自治の政治学 井出 孫郎  
 演習行政法 上・下 山田幸雄他  
 地方自治の日本的風土  
 演習地方財務 仙波節夫他  
 瀧川幸辰刑法著作集1-5 瀧川 幸辰  
 国家の経済1-5 難波田春夫  
 女子学生の面接試験 金平又二他  
 経営組織の環境適応 加護野忠男  
 注釈労働組合法 上 東大労働法研究会  
 会社法人格否認の法理 江頭憲治朗  
 行政手続と行政処分 南 博方  
 近代国際私法の形成の展開 多喜 寛  
 やさしい法令用語の解説 小島 和夫  
 統 " "  
 海洋開発の国際法 高林 秀雄  
 領海制度の研究 "

裁判官弾劾法精義 上村千一郎  
 刑事訴訟法1-4 青柳 文雄  
 転換期における労使関係の実態  
 労使関係調査会  
 日本婦人問題資料集成第9巻 丸岡 秀子  
 アメリカの法律家 飯島 澄雄  
 自然科学 (400)  
 老年学 太田節夫他  
 シカの生態とその管理 飯村 武  
 青年の精神病理1. 笠原 嘉也  
 躁うつ病の精神病理2. 3 宮本 忠雄  
 統計入門 松下嘉米男  
 海洋環境調査法 日本海洋学会  
 心理学と医学のあいだ ラックマン  
 病態栄養学講座1-4 阿部正和他  
 不眠症 遠藤 四郎  
 高速液体クロマトグラフィー 波多野博行  
 他  
 食料栄養健康 食料栄養調査会  
 異常環境の生理と栄養 万木良平他  
 食品添加物の分析法 慶田雅洋他  
 の毒性と特性 谷村 頤雄  
 混迷のなかの節食 大磯 敏雄  
 ブラックホール テイラー  
 ガンとビタミンC ポーリング他  
 ビタミンC とかぜインフルエンザ  
 ポーリング  
 消費者にできる食品簡易テスト 増尾 清  
 野菜は選だ 岩尾 裕之  
 工学及び家庭学 (500)  
 天然染料の研究 吉岡 常雄  
 こぎん 三宅喜久子  
 デンマークのクロスステッチ ベングトソン  
 公害問題と科学者 川崎 健  
 環境公害の法律 野村 好弘  
 海洋生物のPCB汚染 日本水産学会  
 海の生態学と測定  
 食品加工技術ハンドブック 食品技術士  
 センター  
 天然物便覧 外山 章夫  
 食品工場における微生物制御 河端 俊治  
 食品工学の基礎 チャーム  
 水質汚濁の自動分析 荒木 殷他  
 大気汚染



シルクロードの手芸  
女性の自立と家政学  
産業 (600)

商業英語  
ルース・未来を開く  
芸術 (700)

上村六郎染色著作集6  
古代美術の祭式  
わたしの愛する画家彫刻家 (3)  
山歩き、山暮らし  
山砦の音  
垂直に接ひ  
ランニングと脳  
実践コーチ教本1-3  
色彩計画ハンドブック  
日本原始織物の研究  
コミマサ・ロードショー  
語学 (800)

日本語の世界9  
日本語と日本文化  
意味の諸相  
構造的意味論  
日英語比較講座1・2・3  
国語学大辞典  
日本の言語学7  
文学 (900)

ゲーテと詩  
ゲーテ全集第4巻  
魅せられたる魂1-10  
アカルナイの人々  
平和  
高村光太郎詩集  
コロノスのオイデプス  
テーバイ攻めの七将  
紅い花、青い花  
幻想飛行機  
バリの断頭台  
フランス詩集  
花の文化史  
愛と現実  
立川文庫の英雄たち  
杖の夢  
新宮本武蔵  
珈琲店のシェイクスピア

高橋 春子  
石田 貞  
宮田 雪夫  
上村 六郎  
ハリソン  
増田 洋他  
西丸 露哉  
芳野 満彦  
吉尾 弘  
久保田 競  
松井 秀治  
川添泰宏他  
岡村吉右衛門  
田中小実昌  
外間 守善  
多田道太郎  
国広 香弥  
国語学会  
服部四郎他  
星野 慎一  
ゲーテ  
ロラン  
アリストパネーマ  
高村光太郎  
ソポクレス  
アイスキュロス  
小泉八雲他  
レヴィ  
コーツ  
足立 巻一  
江国 浩  
光畑 龍  
小田島雄志

# ベストセラーズ

昭和56年12月21日付日本読書新聞より

- 東京 (紀伊国屋書店)
- 1位 「驚異の椎蘭健康法」 甲斐 良一
  - 2位 「あなたは100歳まで生きられる」 西田 達弘
  - 3位 「蒼い柿」 高津 龍二  
他
  - 4位 「慢性病が治る導引術入門」 早島 正雄
  - 5位 「日本の良心」 井村 順
  - 6位 「法華三部経大系総論」 五井 野正
  - 7位 「この巻頭は噓りやまず」 恒川 良一
  - 8位 「ビートたけしの幸せせひどり占め」
  - 9位 「仮面舞踏会」 K・ウイリアムス
  - 10位 「なめんなよ・又吉のかつとびアルバム」 草野 功  
名古屋 (ちくさ正文館)
  - 1位 「なめんなよ・又吉のかつとびアルバム」
  - 2位 「ことばと国家」 田中 克彦
  - 3位 「納税者の権利」 北野 弘久
  - 4位 「プルトニウムの恐怖」 高木仁三郎
  - 5位 「大学でなにを学ぶか」 隅谷三喜男
  - 6位 「中国の女たち」 J・クリステウア
  - 7位 「味の群像(上)」 堺屋 太一
  - 8位 「日本語とタミール語」 大野 晋
  - 9位 「生命潮流」 L・ワトソン
  - 10位 「理科系の作文技術」 木下 是雄  
大阪 (旭屋書店)
  - 1位 「法華三部経大系総論」
  - 2位 「仕手株だけが儲けする」 龍 正二
  - 3位 「なめんなよ・又吉のかつとびアルバム」
  - 4位 「日本の良心」
  - 5位 「頭がくるくる頭をくるくる」 服部 勇佳
  - 6位 「朝日新聞の用語の手びき」
  - 7位 「歴史と名将」 山梨勝之進
  - 8位 「仮面舞踏会」
  - 9位 「京王帝都」 合葉 博治  
他
  - 10位 「ヤング・タウン・8」